CLOSE-UP **Interview**

堀　浩樹　大学院医学系研究科教授

三重県に愛着を持ち地域医療を支えていく医者を育てたい。

三重大学医学部医学・看護学教育センターでは、医学教育を通して新しい地域医療の形を築こうと、さまざまな活動を展開している。センター長として取り組みを推進するのは、大学院医学系研究科の堀浩樹教授。その原点には、小児科医としてキャリアを積み、海外での医療協力プロジェクトにも携わりながら、ずっと抱いてきた地域医療への想いがある。地域の人々に注がれる教授のまなざしは、優しいぬくもりに満ちている。

センター内には、ミーティングなどで学生たちが自由に使える部屋も。

小児科医として経験した子どもの死やアフリカでの日々について講義。

小児科医としての出発

豊かな自然に恵まれた三重県は、その半面、山間や海辺の小さな村の医療過疎が問題となっている。大学院医学系研究科の堀浩樹教授も、そんな医療過疎地の出身だ。幼い頃から地域の現状を肌で感じ「将来は地域医療を担う医者になろう」と三重大学医学部へ。しかし、小児白血病の診療と研究で最先端を走っていた小児科に興味を持ち、「子どもたちの命を、がんに奪われてはならない」と医学部附属病院で小児科医への道を進む。卒業後しばらくは、大学から派遣された各地の病院で勤務。毎晩呼び出しコールに駆けつけたり、1日置きに当直を担当したりとハードな日々を送る。しかし、教授は「救急患者さまが次々に運ばれてくるような現場でいろいろな経験をし、小児科医としての力をつけさせていただいた」と振り返る。

アフリカで学んだ地域医療の原点

転機は、小児科医になって7年目、大学に戻って程なくのことだった。三重大学はその前から国際協力機構（JICA）のプロジェクトに協力し、アフリカ各地の病院へ医師を派遣していたが、教授も西アフリカのガーナ大学野口記念医学研究所へ客員研究員として派遣されることになったのだ。現地へ渡った教授は、首都から1時間程の農村で一次診療に従事。公衆衛生の改善のために衛生教育や予防接種なども行い、活動による改善状況を分析するなど研究活動にも取り組んだ。「人口動態を把握するにも戸籍がないので、地域の地図を作り、そこに一軒一軒、家を書き込んで聞き取り調査を行うことから始めました」。人もいない、お金も病院もないアフリカの地域の問題は、日本の地域が抱える問題にも通じる。現地での地道な作業は、教授にとって地域医療の原点を学ぶ機会ともなった。

地域医療教育を推進する拠点として

三重大学医学部では、標準的な医学教育に加えて、国際性と地域性に重点を置いた独自教育を展開している。例えば国際性については、医学部6年生を1ヵ月間、アフリカをはじめ各国の病院に派遣する海外臨床実習（※1）を行い、学生の意欲向上など大きな成果につながった。また、ここで明らかになった語学力不足などの課題を解決するため、去年から1、2年生を対象に1週間の海外医療体験を実施。今年は臨床現場で使う医学英語のトレーニングを始め、海外からの遠隔授業も予定される（※2）。こうした教育の国際化には、教授の海外での経験が活かされている。一方、地域性については、三重県の医療を担う人材育成の拠点として、地域と連携した多様な活動を展開している。これらの医学教育を統括するのが、医学・看護学教育センターだ。教授は昨年、センター長に就任。指導体制を強化し、現在は新たな地域医療教育の構築に向けて、意欲的な活動を展開している。

地域に愛着を持たせる教育を

新たな地域医療教育の目玉の一つが、1、2年生を対象にした、地域での保健教育プロジェクトだ。その内容は、例えば赤ちゃんが高熱を出したときにどう対処したらいいのか、など地域の人々にとって身近な問題をテーマに、学生が自分たちで調べた結果を市町村と協力した保健教育の場で発表するというもの。教授の言葉によれば「地域の人々と対話することにより、その期待を学生の心に直接響かせるような活動」に力を入れている。また、3、4年生には、地域病院へ応援に行く教員に同行させることで、当直や救急医療も含めた医療体験学習の機会を提供。5、6年生には大学病院だけでなく、地域の病院とも連携して臨床実習を行っていく予定だ。「6年間一貫して地域と連携し、地域に愛着を持たせるような教育を構築していきたいと考えています」

卒前から卒後まで支援していく

教授は、センターの将来構想として自身の希望を語る。「医療過疎地から受け入れた地域枠の学生が、卒業後、地域に貢献してくれるように卒後臨床研修部や地域と連携して支援していくことが必要です。そのために、卒前だけではなく卒後も含めた人材育成活動に取り組んでいきたいです」。医学教育を通して、「能力のある医者を育てたい、心のある良医を育てたい、そして、三重県に愛着を持って地域医療で活躍してくれる医者を育てたい」と教授。地域医療を支えたいという使命感は、大学入学当時と少しも変わってはいない。

休みのない日々が続く教授だが、その息抜きとなっているのが自宅で飼っている魚たちだ。「うなぎの稚魚にドジョウにナマズ…。家族には嫌がられますが、子どもの頃、田舎でよく捕っていたんですよ」。センター長になってやっと初心に近づけた、と微笑む教授。地域医療を担う人材を育て、少しでも地域に貢献したいという熱意が、人々の心を動かし三重県の医療の未来を支えていく。

（※1）海外臨床実習
この取り組みは「海外医学部と連携した臨床医学教育」として、2006年度、文部科学省の特色ある大学教育支援プログラムに採択された。

（※2）海外医療体験・医学英語・遠隔授業
これらの取り組みは「保健医療の国際化に対応する医学教育」として、2009年度、文部科学省の大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラムに採択された。

堀　浩樹　ほりひろき
大学院医学系研究科教授
専門分野は、小児科学、血液腫瘍学、国際医療協力

新生児室の様子
タンザニアの国立病院に赴任し、新生児室の問題点を調査したことも。

カンファレンス
今後の方針をスタッフと共有し、活動を進めている。

地域医療の原点
ガーナの農村で地域の人々を診療。ときには部族語でコミュニケーション。

七里御浜
故郷にある美しい海岸。うなぎの稚魚を捕って遊んだ。

アフリカの思い出
研究室は、さまざまなアフリカの工芸品で飾られている。